

自然史学会連合講演会「自然史まつり in いばらき」

北山太樹

昨年11月23日(日)、ミュージアムパーク茨城県自然博物館(坂東市)にて自然史学会連合同館の主催による平成26年度自然史学会連合講演会「自然史まつり in いばらき」が開催された。自然史学会連合は、国内39の自然史研究系学会・協会が加盟し、「自然史の多くの専門分野に共通する問題を討議して意見を集約し、協力して自然史科学全体の研究教育の振興をはかるとともに、立ち遅れている研究教育態勢の抜本的な改善を目指す」(同連合HPの「設立理念」より)す団体で、日本藻類学会も加盟している。この理念を具現する活動のひとつとして毎年、県立の博物館などを会場に講演会を主催してきた。今回は新しい試みとして、午前の講演に加え、午後に7団体の加盟学協会と同博物館(2ブース)による9つのブース型体験教室(午後の部)を盛り込んだ二部構成の「自然史まつり」が企画されたので紹介したい。

午前の部は「第一線の研究者が語る進化の謎」と題して、恐竜、四肢動物、緑藻、外来生物の専門家4名が講演された。なかでも藻類学会員でもある野崎久義先生(東京大学)の講演「ボルボックスの仲間を用いて探るメスとオスの進化」は、研究者ならずとも興味をもつ古代からの謎に藻を武器に迫るもので、満場(183名)の聴衆の好奇心を満足させていた(図1)。とりわけ藻類研究者がフィールドでどのようにして藻を探し、そして目的の藻を見つけたときにどのような歓喜の声をあげるのかを臨場感たっぷりに語る野崎先生の姿は、あたかもサイレント映画の活動弁士のごとくで感動的であった。

午後の部「体験!わくわくミュージアム」では、同館のセミナーハウスに日本藻類学会から日本人類学会まで7学会がブースを出店した。日本藻類学会は、やはり藻類学会員である野田三千代先生(海藻おしば協会)に登板をお願いし、「海藻おしば教室—海の森からの贈り物—」のタイトルで参加体



図2. 海藻押し葉教室。海藻アートの奥義を伝授する野田先生。

験型ブースを実施した(図2)。会場には645名の方が来場して海藻押し葉アートの世界を堪能し、また希望者は1回10名の定員で葉書サイズの押し葉作りを体験することができた。伊豆の海に寄り添う筑波大学下田臨海実験センターに長年非常勤職員として勤務された野田先生によって編み出された海藻アートの秘技奥義が、このブースで惜しむことなく披露され、海藻の美しさ・多様さが参加者の心に残る教室となった。実際、連合が纏めたアンケートからも「海藻おしば教室でいろいろな形の海藻で絵をつくったのがおもしろかったです」(小5女子)、「普段何気なく見ている植物や海藻類、菌類など、神秘の世界に一歩迫った企画、とても素晴らしかったと思います」(女性)、「海藻押し葉が五感で楽しめてよかったです」(男性)など好評であったことがうかがえた。今回世話役として参加した筆者にも海藻の押し葉標本製作を指導する機会があるけれども、美しさという点で野田先生にはかたじけなく及ばない。海藻の美しさを科学として扱えるようになる時代はまだ先としても、多くの国民が海藻の正確な姿を知らないと思われる現状にあっては、まず「海藻が美しい」ということを人びとに伝えることが、藻類教育のもっとも大きな入り口になりうるのではないかとあらためて思うものである。

同連合は今後もこの形式の講演会を継続する意向で、日本藻類学会も引き続きブースに参加することが期待されている。次の会場は三重県の施設が候補に挙がっているが、残念ながら連合はブースの講師に旅費を出さない方針である(野田先生には伊豆から自費で来ていただいた)ため、次回(本年11月頃)は近畿地方在住の会員にお願いすることになる模様である。ご協力いただける方は北山(kitayama@kahaku.go.jp)へお知らせいただきたい。

(国立科学博物館)



図1. 講演。創世記以来の謎、メスとオスの起源を語る野崎先生。